

## 「帝王・吉田拓郎」

フォークソングの帝王・吉田拓郎が引退宣言をした。1960年代の後半、学生運動が全国で展開されていたころ、反体制・反商業主義のアングラこそフォークという時代であった。そんな中で「これこそはと信じれるものが、この世にあるだろうか？♪」と『イメージの詩』でデビュー、広島では人気を得たが、コンサートでは歌が聞こえないほどの「帰れコール」と罵声を浴びたという。彼は、日々の生活での個人的な感情をより日常的な言葉で歌ったに過ぎない。しかし、学生運動で体制と闘い続ける若者にとっては、彼のフォークは「軟弱」に映ったに違いない。

70年代に入り、安保闘争で敗北した学生たちには、闘う意欲を失い「しらけムード」が漂い始めていた。そんな若者たちの間で拓郎の「結婚しようよ」や「旅の宿」が大ヒットした。フォークソングが政治やアングラから離れた第一歩だった。井上陽水の「傘がない」、南こうせつとかぐや姫の「神田川」もそれに続いた。

私は幼い頃のケガで左手薬指を少し欠損し、その指ではギターを弾くことができなかった。指サックなどを使って自分で薬指のシルキヤップ作り何とかギターを弾けるようになったころ、吉田拓郎にのめりこんだ。

静岡で過ごした大学時代、駅前通りに「ワシントン靴店」のビルがあり、屋上はもちろんビアガーデンであった。大ジョッキ(今のメガジョッキ)とおつまみで300円は安かった。一杯を飲み終えて酔いがまわり始めたころ、友人とビアガーデンの片隅にある小さなステージに上がって、ギター片手に拓郎の「春だったね」を歌った。実はこのビアガーデンでは、学生がステージで引き語りで一曲歌うと、生ビールの大ジョッキが一杯無料になるサービスがあった。ギターが上手いわけでもないし、歌も音痴ではないが声量があるわけでもなかったが、その一杯を飲み終えたころで再びステージに上がって歌った。でも「帰れコール」はなかった(笑)。

もう30年ギターに触れていないが、ふと懐かしくなり、豊翔高等学院の文化祭のステージで拓郎を歌って、その年度末に豊翔を引退するのはどうだろうかと思った。今、本物のシルキヤップを予約している。

「私は今日まで生きてみました♪・・・そして今、私は思っています♪ 明日からもこうして生きてゆくだらうと♪」(吉田拓郎『今日までそして明日から』)

でも、今年はまだステージには上がらない(笑)。

(丹羽 豊)